

教育課程部会 (第118回) 意見概要

(新しい時代の高等学校の在り方ワーキンググループ関連)

- 専門高校は、教養科目の時間数が普通高校から比べると少なく、その結果として大学入学試験における不利というのは免れないという状況にあり、資料4-1には、大学や就職などの出口を目標にしないと書いてあるが、高校生にとっては目先の大学入学が目的になっている現状がある。高大接続のところで協議されているとは思いますが、出口である大学や企業が何を評価して選別すべきかということをも根本的に見直して、その方針を開示しないと、高校教育の改革というのは実現しないのではないかと。
- 「普通教育」の「普通」が何を意味するかという議論が必要だと思うが、何が普通なのか、その対義語は何なのかということも考えると、「普通」という言い方をやめたほうがいいのではないかと。
- 一般社会では、かつて自分の体験してきた教育内容の枠組みの中から高等学校教育を考えられている面が多くあるのではないかと。そういった現状の方向を転換するためには、スクール・ミッションの再定義が非常に大事になってくる。スクール・ミッションの再定義を社会全体の課題として捉え、これからの高等学校教育の在り方を世間一般で周知し、議論していくことで高校改革が有効に機能していくことになると考えている。
- 高校の実態に応じつつ、普通科をどう定義し、どう考えていくのかということについても、さらにワーキンググループ等で深めていただき、それを受けて、教育課程部会でさらに進めていくことができると思う。
- 「普通科」という名称は、以前から変えたほうがいいのではないかと考えていた。普通科という名称は、恐らく、工業科や商業科に対しての「普通」だと思うが、そうではなく、きちんとしたアイデンティティを持たせた、内容に即した名前にした方がいいのではないかと。

- 対面指導とICT活用の二元論ではなく、ベストミックスする方が当然いいに決まっているが、誰がやっていくのか、どうやっていくのかという戦略がないと、なかなか難しいのではないかと。

- 対面指導かICT活用かという二元論に陥ることなく、最適な組合せが必要である点には大変賛同するが、例えば、教育格差、学力格差を生まないという前提に立って、どのように学習評価をするのかという点に難しさがあるのではないかと。

- コロナ禍において、ICTに触れられた高校生と、実際にはそうした授業が受けられなかった高校生の声を聞いてきた。GIGAスクール構想では、義務教育にはICTが配置されたが、高等学校において格差が大変大きくなっているという現状があるが、様々な調査を見ると、オンラインで授業を受けた高校生に関して言えば、高校生は、教師の期待以上に柔軟にICTの操作に対応ができています。また、対面とオンラインのどちらが良いのかについて、数千名を対象にした調査があり、高1や中1は、学校再開に当たって対面を希望していて、高2、高3や中2、中3といった、既に学級経営や、ある種の一体感ができているところでは、ICTを好む傾向があるというデータも出ています。指導に関して対面とICTとの二元論に陥ることがなくということは書かれているが、学年段階によっても、高等学校が高等学校としてあるために、対面で機能しなければならないものと、ICT可能なものという観点も今後必要になってくるのではないかと。

- 資料4(論点整理)の捉え方や考え方において、義務教育との接続の在り方について、もう少し議論を深めていただく必要があるのではないかと。

*上記内容は、委員の了解を取っておらず、事務局がまとめたものである。